

韓国の大学における日本語非母語話者を招いた デジタルセッションの意義

－ 第三者言語接触場面の観点から －

松浦恵子*

(e-mail : mamechan21@gmail.com)

目次

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------------|
| 1. はじめに | 6. 結果 |
| 2. 本稿における「学習者」と「ゲスト」
の定義 | 6-1. 「ふりかえりシート」及び「授業ア
ンケート」の回収 |
| 3. 先行研究 | 6-2. 分析方法及び結果の分類 |
| 4. 研究課題 | 7. 考察 |
| 5. 日本語非母語話者デジタルセッション概略 | 7-1. 結果から |
| 5-1. 1学期間の流れ | 7-2. 研究課題の達成 |
| 5-2. 実施クラスの概要 | 8. 今後の課題 |
| 5-3. ゲストの募集方法 | 9. 参考文献 |
| 5-4. デジタルセッション当日の内容と流れ | 10. 付録1, 付録2 |
-

1. はじめに

現在、日本に滞在する外国人の数は増えており、法務省の統計では、944万3,696人に上る¹⁾。それに伴い、日本国内において日本語母語話者と日本語非母語話者のコミュ

* 釜山外国語大学校 ビジネス日本語学部 助教授

1) 平成22年度（2010年）法務省白書
(http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_nyukan.html) 2012年5月20日閲覧

ニケーションはもちろんのこと、日本語非母語話者同士が、日本語でコミュニケーションをする機会が増えていると考えられる(マーハ・本名 1994) (ファン 1999)。韓国では近年、大学を卒業しても就職難(大卒正規雇用は39.6%)²⁾のため就職が難しい。そのためか競争力をつけてから卒業しようと大学在学中に一度休学し外国に語学研修に行く学生が多く見られる。また、近年のウォン安円高の影響を受け、留学・就学ビザよりもワーキングホリデービザで外国に行く学生が増えているように見受けられる。これは、外務省のホームページからも明らかである。日本と韓国の間でワーキングホリデー制度が始まった2000年は、申し込み数が1,383件に対しビザ発給数が973件であった。その後、2002年には申し込み数4,445件に対しビザ発給が1,776件、2005年には申し込み数8,844件に対しビザ発給が1,801件、2007年には申し込み数11,385件に対しビザ発給が3,600件となっている。さらに2011年10月からは発給数が10,000件に拡大された³⁾。そのような学生達が、日本の特に首都圏で体験するのは日本語母語話者とのコミュニケーションのみではなく、日本語非母語話者とのコミュニケーションだ。それはアルバイト先や日本語学校、地域の日本語教室であると考えられ、日本語非母語話者同士がお互いの言語がわからない場合(例:韓国人とロシア人が話をしたいが、韓国人はロシア語がわからずロシア人は韓国語がわからない場合)、コミュニケーションの手段として日本語を使うことになる。これは韓国国内であまり体験できることではない。今後もワーキングホリデーなどで日本に行く学生達が増えることが予想されるが、経済面や個人の事情により誰でも日本に行けるというわけではない。一方、韓国で一般的に行われている日本語の授業と言えば、文法や会話、読解、聴解、作文など言語知識を蓄え運用し四技能の習得を目標としたものが一般的だと思われる。その中で日本語母語話者の教員が担当するのは、教科書やプリントを使用した会話の授業の他にビジターセッション(松浦・小川 2011)や、プロジェクトワーク(松田 2006, 小林2011)などが挙げられるが、日本語母語話者と会話をするにより会話能力や社会文化的能力(横須賀2003)の向上を図ろうとしているものが多い。

韓国国内においては、韓国語や英語が母語ではない者同士のコミュニケーションに用いられる可能性があると考えられるが、日本語の場合はどうであろうか。韓国語や英語と比べて少ないのではないだろうか。このような状況を踏まえ、釜山外国語大学の筆者担当の授業では、日本語は日本語母語話者とのみ使うのではなく、日本語非母語話者同士のコミュニケーションの手段にもなりうることを体験させるべく、日本語非母語話者を招いたビジターセッションを実施した。本稿では、そのような授業終了後に宿題として出し、後日回

2) 韓国の教育科学技術部および韓国教育開発院の2009年の調査発表によると4年制大卒の就職率(正規雇用)は、39.6%である。

3) 在釜山日本国領事館ホームページによる(<http://www.busan.kr.emb-japan.go.jp/jhtm/new111226.htm> 2012年1月12日閲覧)

収した授業のふりかえりをまとめ、韓国の大学における日本語非母語話者を招いたビジターセッションについてその意義を考えてみる。

2. 本稿における「学習者」と「ゲスト」の定義

本来なら筆者の授業を履修している韓国人の学生も、授業にゲストとして招かれる側も同じ日本語学習者である。しかし、本稿では、以下のように呼ぶこととする。

「学習者」… 筆者の授業を履修している韓国語母語話者。

「ゲスト」… 授業に招く韓国語母語話者ではない日本語非母語話者。

3. 先行研究

日本語非母語話者同士の日本語使用に関する研究は、(ファン1999,2003,2006)(春口2003)(田崎2007)などがある。ファン(1999)では、日本語非母語話者同士の会話に基づいて会話参加、言語バリエティー及び意味交渉の3つの角度から言語問題をとり上げ、分析している。さらに(ファン2006)では、この日本語非母語話者同士の接触場面を「第三者言語接触場面」と呼び、その論文で以下のように締めくくっている。

‘第三者言語接触場面や共通言語接触場面のインターアクションを射程に入れることによって、接触場面の研究をさらに進展させていく必要がある。(中略)接触場面研究は、日本語非母語話者が日本語でインターアクションするまさにその「現場」のデータから教育のプログラムを組み立てていくための第一歩’

であるとしている。このように、日本語非母語話者同士の接触場面研究はまだ発達段階であり現場からのデータが研究発展および教室への還元の鍵をにぎると思われる。そして春口(2003)では、日本語母語話者と日本語非母語話者および日本語非母語話者同士の会話を通して日本語能力上級者が持つ言語ホスト性を明らかにしている。また、田崎(2007)でも、日本語母語話者と日本語非母語話者、そして日本語非母語話者同士のやりとりを分析し、接触場面の使用言語が参与者のコミュニケーションへの参加方法や関係に大きな影響を与えるとしている。しかし、これらは全て研究対象となった日本語非母語話者側の視点や心理的变化を中心にしたものといえがたく言語管理面に焦点があてら

れている。また、これらは実際の授業からの研究ではなく授業外の場における研究である。筆者が勤務する大学では、時折中国などの留学生がいるクラスがあるものの、クラス全員が韓国語母語話者という環境が大半である。上述のようにワーキングホリデーに行く学生は増えているが、全員が行けるわけではない。そこで筆者は学習者が、日本語非母語話者同士の会話とはどのようなものかを韓国にいながらにして体験させるべく、ビジターセッションを実施した。

4. 研究課題

本研究では、以下の 2 点を研究課題とした。

A 韓国における日本語非母語話者を招いたビジターセッションは、日本語母語話者を招いたのとは違う意味で有効ではないだろうか。

Bこのような授業を通して、学習者は視野の広がりやコミュニケーションの道具としての日本語を体験できるのではないだろうか。

5. 日本語非母語話者ビジターセッション概略

5-1. 1 学期間の流れ（1 学期の場合）

韓国の四年制大学は、ほとんどの場合 1 学期と 2 学期から成る 2 学期制である。その大まかな流れは以下のようなものである。

<表 1 1 学期間の流れ>

	ビジターセッション	ビジターセッション以外の時間
3月	日本語母語話者ビジターセッション (1回)	●レディネス調査 ●語彙・表現・会話練習 ●ビジターセッション準備/フィードバック等
4月	日本語非母語話者ビジターセッション (1回)	●ビジターセッション準備/フィードバック等 ●語彙・表現・会話練習 ●中間テスト
5月	日本語母語話者ビジターセッション	●ビジターセッション準備/フィードバック等

	(2回)	●お礼のお手紙等 ●レポート
6月		●補講・期末テスト

5-2. 実施クラスの概要

このビジターセッションを実施したクラスの概要を以下に述べる。

- 授業名 : 「日本語高級会話Ⅰ」「日本語高級日本語会話ⅠⅠ」⁴⁾
 学生数 : 定員30名
 対象学年 : 日本語学部3年生(学期によっては日本語学部以外の学生を対象にも開講された)
 実施期間 : 2008年1学期 ~ 2010年1学期(合計5学期間)
 授業時間数 : 3時間/週 × 16週(50分2コマの日と、50分1コマの日に分かれる。ビジターセッションは、50分が2コマの日に実施。またオリエンテーション、中間・期末テスト、補講期間を除くと授業は正味12週間)
 授業形態 : 3、4人で1つのグループを作り、各グループに1人か2人のゲストが入る。
 回数 : 1学期間に1回のみ。

なお、基本的には上記の通りであるが、実際は日本語学部の学生のみ30人というクラスは珍しく、毎学期他学科の学生が混じっている。さらに大学のカリキュラム上、3年生以外(2年生、4年生)も実質上履修可能である上に履修登録の際、日本語のレベルチェックは行わないシステムとなっている。そのため、毎学期多少のレベル差が発生する。

5-3. ゲストの募集方法

ゲストは以下の方法で募集した。

- 筆者が過去に教えたことがある留学生。
- 同僚や知り合いの日本人、学生を通しての紹介。

過去に筆者が教えたことがある留学生は、日本語のレベルが把握できているが、紹介

4) 「日本語高級会話Ⅰ」は1学期に、「日本語高級会話Ⅱ」は2学期に開講される。

の場合は必ず事前に筆者と 1 対 1 で話をし、レベルを把握してからゲストとして招くか決定した。紹介を受けても日本語のレベルが学習者と合わない場合は参加を遠慮してもらう場合もあった。

<表 2 ゲストについて>

年度	学期	人数	国籍 (括弧内は人数内訳)	母語	韓国での立場
2008年	1 学期	5	中国 (5)	中国語	学部留学生
	2 学期	5	中国 (4) 台湾 (1)	中国語	学部留学生、主婦
2009年	1 学期	7	中国 (6) アメリカ (1)	中国語 英語	学部・大学院留学生
	2 学期	5	中国 (5)	中国語	学部・大学院留学生
2010年	1 学期	7	中国 (5) 台湾 (1) アメリカ (1)	中国語 英語	学部・大学院留学生、主婦

5-4. ビジターセッション当日の内容と流れ

当日の流れは以下の順序で行われた。なお、括弧内は所要時間を示す。

- ① 学習者による挨拶。(約 3 分)
- ② くじ引きによりゲストが入るグループを決定。(約 3 分)
- ③ 教師・学習者が準備したトピック<表 3 >で話す。
(80 分/途中で10分間の休憩時間があった)
- ⑤ 授業の最後に各グループでどんな話をしたか発表。(10 分)
- ⑥ 学習者による挨拶。(約 3 分)
- ⑦ 宿題配布⁵⁾(約 3 分)

合計約 120 分 (2 コマ)

5) 学習者には授業の感想や反省を文字化させる「ふりかえりシート」(付録 1 参照)を宿題とし、ゲストには授業の感想を記述する「授業アンケート」(付録 2 参照)を依頼した。いずれも日本語での記入を原則としたが、ゲストについては日本語での記入が困難な場合は母語での記入も可とした。

<表3 トピック一覧>

年度	学期	トピック
2008年	1学期	学習者が事前に準備したトピック (グループごとに異なる)
	2学期	「日本ってどんな国？」
2009年	1学期	学習者が事前に準備したトピック (グループごとに異なる)
	2学期	「釜山外大の留学生にインタビューしてみよう」
2010年	1学期	「日本と日本語」

6. 結果

6-1. 「ふりかえりシート」および「授業アンケート」の回収

ビジターセッション後、宿題として配布し回収した「ふりかえりシート」および「授業アンケート」の枚数は以下の通りである。

<表4 「ふりかえりシート」及び「授業アンケート」の回収枚数>

年度	学期	学習者数	ふりかえりシート 回収枚数	ゲスト人数	授業アンケート 回収枚数
2008年	1学期	25	24	5	5
	2学期	20	12	5	4
2009年	1学期	28	26	7	5
	2学期	27	24	5	5
2010年	1学期	31	27	7	5
合計		131	113	29	24

6-2. 分析方法および結果の分類

回収した「ふりかえりシート」及び「授業アンケート」は<表4>のようにそれぞれ113枚、24枚であった。これらをKJ法を使って分類した。その結果、以下のように学習者が①～④の4分類、ゲスト⑤～⑦の3分類となった。

<学習者>

- ①ステレオタイプの払拭

- ②日本語学習へのさらなる動機付け
- ③日本以外の国や文化への興味の広がり
- ④ゲストの使う日本語について

<ゲスト>

- ⑤交流
- ⑥日本語非母語話者とのコミュニケーション
- ⑦学習者には見られなかった記述

以下、学習者とゲストの記述を一部抜粋しながら詳しく見ていく。

<学習者>

- ①ステレオタイプの払拭

「中国人についてステレオタイプがなくなった。」（2008年1学期）

「国を問わず考え方はみな同じだと思った。中国人への偏見を捨てるようになりました。」（2009年2学期）

- ②日本語学習へのさらなる動機付け

「私の日本語はまだ下手ですが、ゲストがアメリカ人なのに日本語の会話が上手でした。私は反省しました。」（2009年1学期）

「中国人なのに日本人のように感じました。私も他の外国人がそう思うくらい日本語が上手になりたいです。」（2009年2学期）

- ③日本以外の国や文化への興味の広がり

「中国に遊びに行きたくまりました。」（2008年2学期）

「もっとゲストの国について詳しく知りたい。」（2010年1学期）

- ④日本語非母語話者の使用する日本語

「よく使う日本語の表現、語彙が韓国人と微妙に違っていました。自分の国の言葉が日本語にしみてくるような気がしました。」（2009年1学期）

「韓国人がしゃべる日本語の発音と違って中国人だけの独特なアクセントがありました。」（2009年2学期）

<ゲスト> (括弧内の国名はゲストの国籍を表す)

⑤交流

「日本人ではない人たちと日本語で会話してもおもしろさがいっぱいあります。」

(2008年1学期/中国)

「友達ができました。」 (2010年1学期/中国)

⑥日本語非母語話者とのコミュニケーション

「もともと違う国の人たちが日本語の授業のおかげで一緒にお互い理解できる言語で話すことはすばらしいと思う。日本人と韓国語でしゃべることも同じ気持ちである。それで世界は小さくなる。」 (2008年2学期/中国)

「非ネイティブスピーカーとのコミュニケーションは学習者を緊張させることはありません。」 (2009年2学期/中国)

⑦学習者には見られなかった記述

「韓国の学生は具体的に意見を言わないようだ。」 (2010年1学期/アメリカ)

「(日本人ではない人と日本語で話すことについてどう思うか、という質問に対して)日本人ではない人達と日本語で会話することは私にはよくあることです。」 (2008年1学期/中国) (2009年1学期/中国)

7. 考察

7-1. 「結果」から

6-2で述べたように、学習者からは4項目の分類が抽出された。①に関しては、(横須賀 2003)でも「生’の日本人の声をきくことによって過去にもっていた自己の日本人観が検証され、日本社会能力の訂正がなされた(後略)」と述べられている。また、②に関しても「自己能力の不足を認識することにより、次回のセッションへの学習に対して強い動機を抱いた(後略)」と述べられている。横須賀(2003)の研究は、日本語非母語話者ではなく、日本語母語話者を招いたビジターセッションにおける日本語非母語話者のふりかえりであるが、本研究により日本語非母語話者を招いたビジターセッションにも通じるものがあることが確認された。学習者が、ゲストの国や人にステレオタイプを持っていたことは、6-2で引用した学習者のコメントからうかがうことができる。これらのステレオタイプは、テレビやインターネットの情報、他の人の話などから作り出されたものではないかと推察される。そし

てかなりの刺激をうけて日本語学習へのさらなる動機付けにつながっているのがわかる。学習者もゲストも共に韓国で日本語を勉強しており、同じ外国語環境にいるが自分の国でも日本でもなく韓国で日本語も勉強しているゲストを見て、非常に驚きまた自分自身を省みて反省し日本語学習をもっとがんばろうと決意を固めているのを垣間見ることができる。

一方で、先行研究に見られなかったのは、③と④である。まず、③では、日本語非母語話者と日本語で会話をしたことがない学習者は、戸惑いながらも新鮮味を感じ、日本語母語話者をゲストとして招いた時に感じる誤用への不安や緊張（松浦・小川 2008）をそれほど感じず、言語よりも比較的内容的なことに目を向けている。これは、お互い日本語母語話者ではないという一種の安心感から来るものだと考えられ、ゲスト側の記述（6-2. ⑥）にも見られた。通常、日本語の授業では、正しい単語や表現、文法を教え、使えるようになるために練習する。しかし、学校の成績や進学、就職とは関係なく、日本語を「コミュニケーションの道具」と考えた場合、正しく使えるかよりもコミュニケーションが成り立てばとりあえず「日本語非母語話者とのコミュニケーションの体験」が成功したと考えることができるのではないだろうか。また、このような体験により今までは目が向かなかった国や文化にも興味が芽生えていることが「中国に遊びに行きたくなりました。」や「もっとゲストの国について詳しく知りたい。」という記述からわかる。次に、④であるが、学習者の記述にもあるようにお互いが日本語非母語話者であるため、誤用が起こっても訂正してくれる人はいない。また、発音やイントネーションの面では、母語の影響により日本語母語話者と同じようにはいかず、コミュニケーションが止まってしまうたり聞き取りにくかったりする。この点は、やはり日本語母語話者には及ばないが、今まで学校や学院等で韓国語母語話者同士または日本語母語話者の教師とのみとしか会話をしたことがない学習者にとっては、母語に影響されたゲストの日本語の発音を聞いて、自分達の発音やイントネーションを見直す良い機会になっている。

では、ゲスト側の記述はどうであろうか。⑤のように授業への協力を「交流」と捉え、新しい友人ができたことや、お互いの理解が深まったこと、学習者が自分の国について興味を持ち質問してきたことを喜んでいる様子が見えてくる。これは、彼らは留学生として韓国にいるものの、韓国人の学生との接触が少なく友人が作りにくかった可能性や、同じ国からの留学生や他の国からの留学生同士で固まってしまうためだと考えられる。このような記述は、筆者が最初に掲げた研究課題とは多少異なるものの、ゲスト側にも少し役に立つ授業になったと言えるのではないだろうか。また、⑥の記述に見られるようにゲスト側も同じように日本語非母語話者同士のコミュニケーションは緊張や誤用への不安がそれほどないと考えており、（ファン 2011）とも一致している。これは、やはり日本語を勉強しているという立場が同じため、学習者とゲストの両方に見られたと考えられる。ところが、学習者に見られた①や②のような記述は、⑦のようにゲスト側にはあまり見られずいささか感動や刺激の少ない体験であったようである。これは、ゲストがすでに自分の国ではなく外国におり、留学生用

の韓国語クラスや韓国文化体験クラスなどで同じように韓国語非母語話者同士でコミュニケーションを取るという体験を日常的にしているからだと考えられる。

7-2. 研究課題の達成度

では、4.で挙げた研究課題は、この授業を通してどの程度達成されたのであろうか。

A 海外における日本語非母語話者を招いたビジターセッションは、日本語母語話者を招いたものとは違う意味で有効ではないだろうか。

7-1. のように日本語非母語話者を招いたビジターセッションでは、日本語母語話者を招いた時のような緊張や誤用への不安が見られない。文法や発音の面では日本語母語話者の方が正確ではあるが、6-2. ①～③の中で特に③はゲストが日本語非母語話者だったからこそ感じたものと言えよう。さらに日本や日本語を見る目が学習者とゲストでは異なるため、新たな物の見方ができたようである。そのような意味で日本語母語話者を招いたものとは違う意味で有効だと言えるのではないだろうか。

B このようなビジターセッションを通して、学習者は視野の広がりやコミュニケーションの道具としての日本語を体験できるのではないだろうか。

中国人、台湾人、アメリカ人のゲストと中国語や英語ではなく日本語で会話し、意見を交わすことにより、6-2. ①に見られるように学習者はゲストの国や人に対するステレオタイプが崩れ去っている。そして③のように日本以外の国にも興味を広げている。このような結果から、「コミュニケーションの道具としての日本語」の体験は成功したと言えるのではないだろうか。ただし、ゲストと話すことにより、それがゲストの国や人に対する新しいステレオタイプにならないよう教師は、ビジターセッション前に学習者に十分留意させておく必要がある。

8. 今後の課題

本稿では、全部で5学期分の「ふりかえりシート」と「授業アンケート」をまとめ、そこに書かれている記述を分類・分析した。そして、日本語非母語話者を招いたビジターセッションは日本語母語話者を招いたビジターセッションとは違う意味で有効ではないかと結論づけた。今後は、ビジターセッションでのトピックの難易度を上げたり、活動にバラエティを持たせたりすることによりさらにコミュニケーションの道具としての日本語を意識化することが可

能ではないかと考えられる。しかし、現実には、次のような問題がある。

(1) 大学のカリキュラムによる制約

大学のカリキュラムにより「高級日本語会話Ⅰ」「高級日本語会話Ⅱ」は1度履修して単位を取れば、その後は受講できない。さらに人数の都合により聴講を認めるのも難しい。

また、履修登録してきた学生を基本的に教師は拒否できないため、クラス内にレベル差が生じることがある。

(2) 追跡調査の困難さ

6-2.に見られた①や②がその後、学習者の日本語学習やゲストの国や人との交流に与える影響に関する追跡調査が困難である。というのも、履修対象者が基本的には3年生であるため、ある一定の期間後の追跡時には大学を卒業したり休学している場合や就職のため連絡が非常に取りにくくなるからである。

(3) ゲスト確保の難しさ

釜山には留学生や駐在員やその妻などの外国人が多数滞在するが、その中で日本語力が一定のレベル以上のゲストを探さなくてはならない。さらに、留学生の場合は招きたくても他の授業と筆者の授業時間が重なると招くことができない。また、本研究では、ゲストの出身国や母語に偏りが見られた。これは、韓国の釜山という限られた土地の中での日本語非母語話者のゲスト確保の難しさを表していると言えるかもしれない。今後は、ゲストの出身国や母語を多様化させることができないか人的ネットワークを広げることができたいと思う。

大学のカリキュラムも関係するため、これらを全て一度に解消することは難しい。しかし、追跡調査は、困難ではあるが全く不可能というわけでもない。追跡調査により日本語非母語話者を招いたビジターセッションで得た感動や刺激が一過性のもので終わってしまった学習者と、その後の日本語学習やゲストの国や人への接触に何らかの影響を与えた学習者がいる可能性は否定できない。これらを明らかにするには、今後の地道な作業と調査、分析が必要となる。また、ゲスト確保に関しては、常に意識をしてゲストを探し確保につながるように努めなければならない。さらに、(ファン2006)のようにこのような現場からのデータをどのようにして教育プログラムに生かすかを、慎重に検討しなければならない。

9. 参考文献

- 小林友美 (2011) 「韓国の大学におけるインタビューを用いたプロジェクトワークの試み」
大韓日語日文学会 2011年度春期国際学術発表会 予稿集 pp.12-17
- 田崎敦子 (2007) 「接触場面のコードスイッチングが参与者に与える影響」『異文化コミュニケーション研究』第19号 pp.85-99
- サウクエン・ファン (2011) 「第三者言語接触場面と日本語教育の可能性」『日本語教育』150号 pp.42-53
- ファン、S.K. (1999) 「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語学』第2巻 第1号 pp.37-48
- Fan, Sau Kuen 「日本語の外来性 (foreignness) :第三者言語接触場面における参加者の日本語規範および規範の管理から」『接触場面と日本語教育－ネウストプニーのインパクト』明治書院 pp.3-21
- 中川康弘 (2007) 「第3者環境に住む多言語使用者の調整行動とその規範 -バンコクに滞在するベトナム人女性の事例から-」『神田外国語大学紀要』第20号 pp.1-22
- 春口淳一 (2003) 「言語ホストとしての上級学習者の自己参加調整ストラテジー -第三者言語接触場面における会話参加の一考察-」『千葉大学日本文化論叢』5 pp.73-86
- マーハ、J.C.・本名信行 (1994) 『新しい日本観・世界観に向かって』国際書院
- 松浦恵子・小川靖子 (2011) 「日本人ゲストを招いた会話授業の試み -韓国の大学における接触場面での学生心理の変化-」『日本文化学報49輯』 pp.149-164
- 松田勇一 (2006) 「日本人へのインタビューを通じたプロジェクトワークの実践と学習者の意義：韓国釜慶大学校における上級日本語クラスでの試み」『茨城大学留学生センター 紀要4』 pp.65-76
- 横須賀柳子 (2003) 「ビジター・セッション活動の意義とデザイン」『接触場面と日本語教育 -ネウストプニーのインパクト』明治書院 pp.335-352
- Jenkins, Jennifer(2000) The Phonology of English as an International Language. Oxford University Press

10. 付録 1

ふりかえりシート

学籍番号：

名 前：

(日本人でも韓国人でもないゲストと日本語で話して)

(はい ----- いいえ)

1. 活動は勉強になりましたか。 4-3-2-1
2. 活動に積極的に参加しましたか。 4-3-2-1
3. グループの人の話をよく聞きよく話せましたか。 4-3-2-1
4. ゲストも活動を楽しんでいたと思いますか。 4-3-2-1
5. 日本人ゲストと今回のゲストは、なにがちがいましたか。

6. 今日の活動で困ったこと・うまくいかなかったことはありましたか。

7. 今日の活動で「ここがよかった」と思ったところがありましたか。

8. 今回の活動で、新しく学んだ語彙や表現は何ですか。

9. 次のゲスト授業で、実行しようと思うことは何ですか (目標)。

10. その他、気づいたこと・感(かん)じたこと・考えたことは何ですか。

付録 2

授 業 ア ン ケ ー ト

名前 ()

電話番号 ()

(韓国の大学の授業に参加して)

1. 以前にこのような授業・活動に参加されたことがありますか。

はい (参加回数 回) / いいえ

(はい ----- いいえ)

2. 活動は楽しいものでしたか。

4-3-2-1

3. 活動・話し合いに積極的に参加できる雰囲気でしたか。

4-3-2-1

4. 学生達も活動を楽しんでいたと思いますか。

4-3-2-1

5. 今まで日本へいったことがありますか。

はい (何回? 目的は?) / いいえ

6. 今回の授業で「ここがよかった」というところがありますか。

7. 今回の授業で「ここを改善すればいいのに」と思ったところがありますか。

8. 今日の授業で困ったことがありましたか。

9. 今日の授業で何か得るものがありましたか。

10. 「次はこんな企画があったらいいのに」というのがありますか。

11. 韓国の大学生と話をして、あなたの国の人とは違うと感じたところがありますか。

12. その他、気づいたこと・感じたこと・考えたことをお聞かせ下さい。

要 旨

近年、日本語学習者の増加や日本における外国人の増加にともない、日本国内では日本語非母語話者同士のコミュニケーションも増えていることが予想される。日本語非母語話者同士がお互いの母語がわからない場合、意思疎通の手段は日本語になることが考えられる。一方、韓国国内の大学では、日本語母語話者を招いたビジターセッションや、日本語母語話者へのインタビューなどを利用したプロジェクトワークも実施されてはいるものの、依然として四技能の習得および運用に重点が置かれている場合が多々ある。本稿では、日本語は、日本語母語話者とのみ使うものではなく日本語非母語話者同士のコミュニケーションの手段となりうることを体験させるべく、日本語非母語話者を授業に招いたビジターセッションを実施した。招かれたのは釜山に滞在する留学生や主婦であった。ビジターセッション後の振り返りから、韓国語母語話者は、相手の国に対するイメージが変わり、新鮮な気持ちで日本語学習のさらなる動機付けを見つけ、そして日本以外の国へと興味を広げていた。一方でビジターとなった側は、すでに韓国という外国にいて韓国語非母語話者同士の会話を日々体験しているせいか、新鮮味はなく純粹に交流を楽しみ、非母語話者同士のコミュニケーションを冷静に捕らえ、韓国語母語話者の様子を観察していた。このような結果から、コミュニケーションの手段としての日本語を体験してみる試みは、韓国語母語話者の学習者に幅広い影響を与えたと言える。

キーワード：日本語非母語話者、ビジターセッション、第3者言語接触場面、
コミュニケーションの手段、体験、視野の広がり

투 고 : 2012. 5. 31
1차 심사 : 2012. 6. 16
2차 심사 : 2012. 7. 7